

新潟県で生産される現時点での 食材について（第2報）

歌 城 純 子・玉 木 民 子

A Study on the Present Situation of Foodstuffs Production
in Niigata Prefecture (Part 2)

by

Sumiko Kashiro, Tamiko Tamaki

I はじめに

食料は一日たりとも欠かせないものであり他の物では代替できない。また節約にも限度があるという意味で国民生活のもっとも基礎的な物質といえる。農業県といわれる本県での米・野菜・果樹などの生産状況や最近県内産として多くお目見得している畜産物の生産状況、さらに日本海に面している本県の水産物の種類や漁獲量など現時点でどのような食材がどの地方でどの位生産されているかを調査してみた。その結果、多少の知見を得たので前号第1報で本県の米と野菜の生産状況について報告した¹⁾。本報第2報では、果樹の県内生産状況と畜産物の生産状況及び水産物の生産額について報告する。

II 調査方法

新潟県庁の県農林水産部、農業総務課を訪れ、農業農林政策室小幡浩之主任のお話をいろいろ聞いてご指導を頂き、その上、平成7年3月新潟県農林水産部出版の「平成6年度新潟県農業の動き²⁾」、「新潟県の園芸と養蚕³⁾」、「新潟県農業の現状⁶⁾」、「明日へ伸びるにいがたの農林水産業⁷⁾」、「にいがたの農林水産業⁸⁾」、および平成元年3月新潟県農林水産部出版の「新潟県園芸指定産地の概要⁴⁾」、平成5年3月農林水産大臣官房調査課出版の「食料需給表⁵⁾」などを参考に調査検討した。

III 生産される食材について

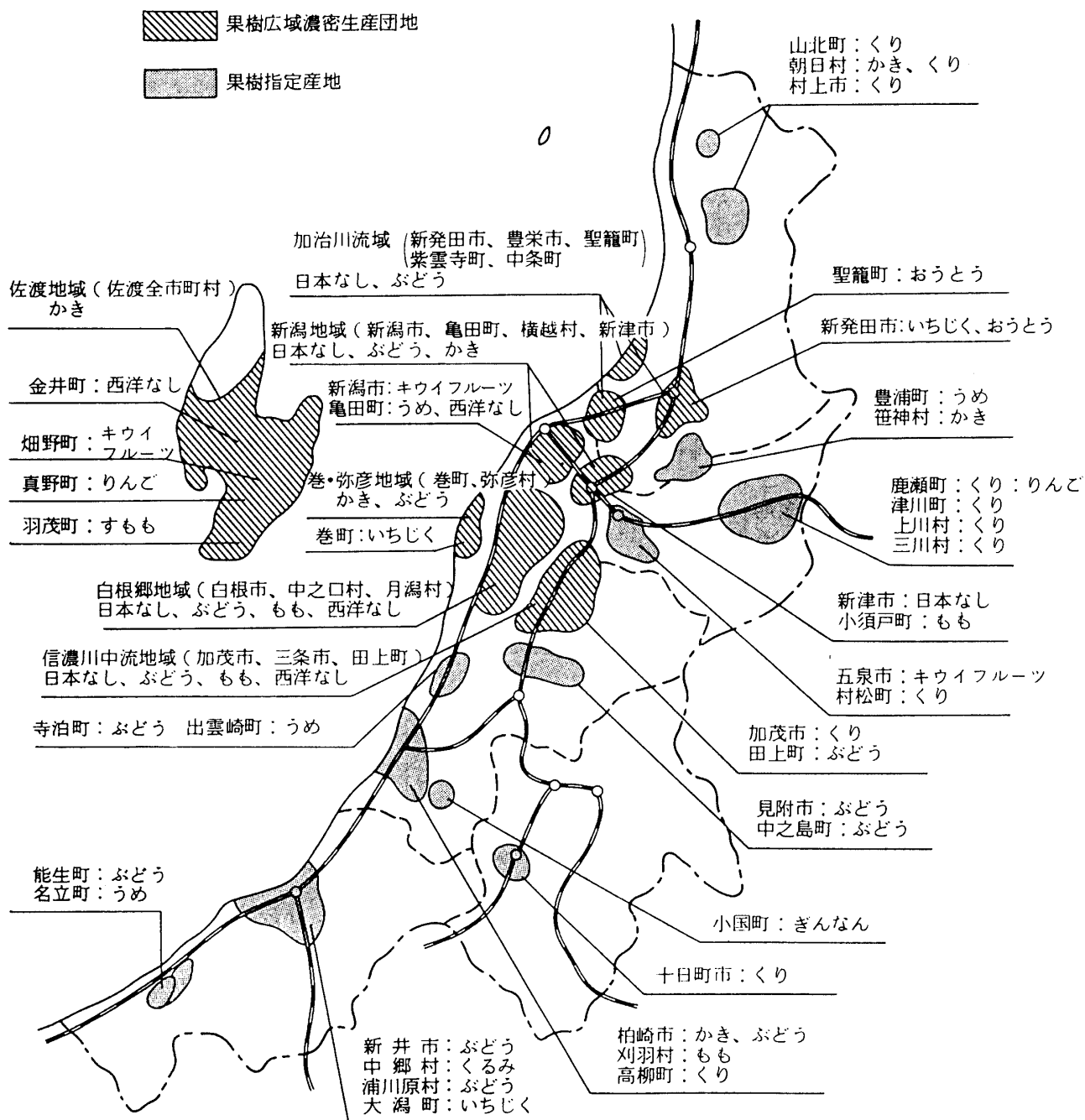
1. 果 樹

新潟県では、日本なし、柿、ぶどう、ももなどの果樹栽培が盛んである。なしやもも等はおもに信濃川ぞいの白根市や加茂市などで、柿は佐渡や巻町で多く栽培されている。新潟県では300年前頃から、日本なしやももが栽培されていたようであるが、柿の栽培は江戸時代に佐渡で始まり、昭和のはじめに「平核無^{ひらたねなし}」という品種をとりいれてから生産がふえ、現在は“おけさ柿”と

いう名前で出荷され、全国的にも有名である。また、最近では西洋なしやキウイフルーツなどの新しい果実が好まれるようになり、これらの栽培面積が年々ふえている。特に明治時代の終わり頃にとり入れられた“ル レクチェ”という西洋なしの品種は最近高級くだものとして人気が出ている。

(1) 果樹の主要産地分布 (図1)

図1 果樹の主要産地分布



(資料：新潟県農林水産部園芸・流通課「新潟県の園芸と養蚕」)

新潟県における果樹広域濃密生産団地³⁾は、図1でみられるように、佐渡地域（金井町、畑野町、真野町、羽茂町）、ついで白根郷地域（白根市、中之口村、月潟村）、信濃川中流地域（加茂市、三条市、田上町）、新潟地域（新潟市、亀田町、横越村、新津市）、加治川流域（新発田市、豊栄市、聖籠町、紫雲寺町、中条町）、巻・弥彦地域（巻町、弥彦村）で日本なし、かき、ぶどう、もも、りんご、うめ、西洋なし、キウイフルーツ、いちじく、すももが生産されている。果樹指定産地と生産果樹は、図1でわかるように下越地区では山北町でくり、朝日村でかき・くり、村上市でくり、豊浦町でうめ、笹神村でかき、鹿瀬町でくり・りんご、津川町、上川村、三川村ではくり、五泉市でキウイフルーツ、村松町でくりが生産されている。中越地区では見附市、中之島町、寺泊町でぶどう、出雲崎町でうめ、十日町市でくりが生産されている。上越地区では小国町でぎんなん、柏崎市でかき・ぶどう、刈羽村でもも、高柳町でくり、新井市でぶどう、中郷村でくるみ、浦川原村でぶどう、大潟町でいちじく、能生町でぶどう、名立町でうめが指定産地⁴⁾として生産されているので指定産地は県内に広く点在しているといえる。

(2) 果樹の栽培面積、生産量、粗生産額（表1）

表1 果樹の栽培面積・生産量・粗生産額

区分	品目	平成4年			平成5年			比較(平5/平4:%)		
		栽培面積 (ha)	収穫量 (t)	粗生産額 (百万円)	栽培面積 (ha)	収穫量 (t)	粗生産額 (百万円)	栽培面積 (ha)	収穫量 (t)	粗生産額 (百万円)
ブランド品目	日本なし	560	15,900	3,474	564	13,600	2,510	101	86	72
	西洋なし	44	455	374	58	549	368	132	121	98
	かき	960	13,900	2,611	958	9,760	1,832	100	70	70
	ぶどう	508	6,700	2,813	505	5,400	2,376	99	81	84
	もも	292	4,300	1,351	289	3,570	1,020	99	83	75
	小計	2,360	41,300	10,600	2,370	32,900	8,110	100	80	76
重点品目	くり	448	437	140	458	289	109	102	66	78
	おうとう	34	54	93	36	44	79	106	81	85
	小計	482	491	233	494	333	188	102	68	81
その他品目	うめ	163	674	204	166	557	145	102	83	71
	りんご	55	674	150	52	580	138	95	86	92
	すもも	8	40	9	8	31	7	100	78	78
	キウイフルーツ	45	276	77	44	259	60	98	94	78
	(いちじく)	16	86	18	16	86	18	100	100	100
	(ぎんなん)	103	27	その他 ⁴⁾	121	44	その他 ⁴⁾	117	163	
	(くるみ)	42	14		45	23		107	164	109
	小計	432	1,790	503	452	1,580	417	105	88	83
合計	3,280	43,600	11,400	3,320	34,800	8,710	101	80	77	

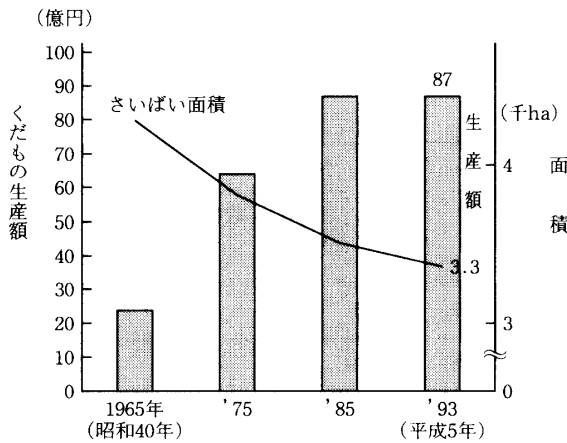
（資料：農林水産省「作物統計」「果樹生産出荷統計」「生産農業所得統計」
園芸・流通課「果樹栽培状況等表式調査」

(注) ラウンドのため合計値等は一致しない場合がある。

平成4年と平成5年の栽培面積と収穫量、粗生産額をあげ比較してみると、栽培面積は西洋なしを除いてあまり変化がないが、収穫量はいちじくは同量であるがぎんなん・くるみは増加している。ぎんなん・くるみは果実というより種実に分類することもあり副食のものとして使用が多い。他の果実は5年には栽培面積が変わらないにもかかわらず収穫量は減少している。果実の需要が減っている様うかがえる。需要と供給の関係から生産が減少しているのではないかと推察される。当然のことながら粗生産額もいちじく、ぎんなん、くるみを除いて減少している。

果樹は永年性作物であり、その生産量を短期間で調整することは困難であること、また収穫作業などに人手がかかるため栽培面積が少しずつ減っているが品種改良やハウス栽培などで品質のよいものは長い間生産するようにくふうし生産額は少しずつふえているが、果実の需要の減少傾向は全国的にもみられる傾向で、食生活の多様化にともない昭和60年度には1人1日当たりの果実消費量は102gで高度経済成長期の47年度121gと比較して低下している。さらに平成3年度食料需給表をみると1人1日当たりの供給量は95.3gに減少している。食生活の品目の多様化、食品の良質志向が高まっていると考えられる。

図2 果物の生産額と栽培面積の移り変わり



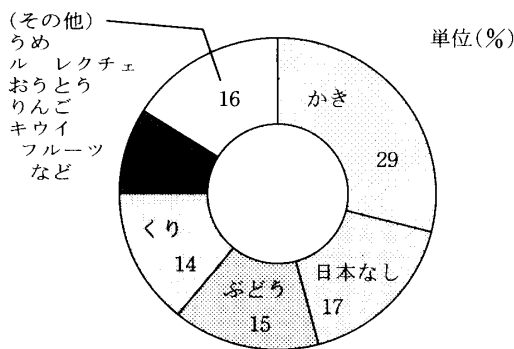
(資料：新潟県農林水産部・農地部 「にいがたの農林水産業」)

昭和40年から平成5年までのくだものの生産額と栽培面積の移りかわりを図2に示すと栽培面積は年々減少しているが果実全体量の生産額は増加の傾向にある。

平成5年のくだものの栽培面積の割合を図3に示すと、かき、日本なし、ぶどう、くり、もも、その他(うめ、ル レクチェ、おうとう、りんご、キウイフルーツなど)がある。

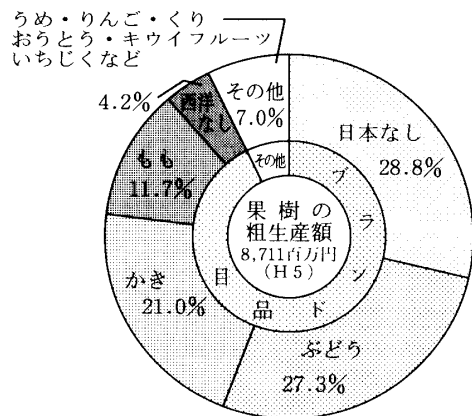
平成5年の果樹の品目別粗生産額は図4に示す通りである。

図3 果物の栽培面積の割合 (平成5年)



(資料：新潟県農林水産部・農地部 「にいがたの農林水産業」)

図4 果樹の品目別粗生産額 (平成5年)



(資料：新潟県農林水産部園芸・流通課 「新潟県の園芸と養蚕」)

(3) 果樹の新植面積・廃園面積の推移 (表2)

表2は平成3年～5年間の新植、廃園を示したものである。日本なし、西洋なしは新植により増加傾向にあるが、かき、ぶどう、ももは減少傾向にあり、とくにかき、ぶどうについては廃園

表2 果樹の新植面積、廃園面積の推移

（単位：ha）

区分	年次		3	4	5	3～5年 の累計	備 考
	品目	項目					
ブ ラ ン ド	日本なし	新植	16	14	13	43	新植により増加傾向
		廃園	3	7	8	18	
		差引	13	7	5	25	
	西洋なし	新植	6	8	13	27	新植により、順調に増加
		廃園	0	0	0	0	
		差引	6	8	13	27	
	かき	新植	4	8	9	21	廃園が多く、減少傾向
		廃園	19	21	11	51	
		差引	△15	△13	△2	△30	
	ぶどう	新植	2	9	11	22	同 上
		廃園	15	25	14	54	
		差引	△13	△16	△3	△32	
もも	新植	1	1	1	3	新植わずかで、減少傾向	
	廃園	11	6	4	21		
	差引	△10	△5	△3	△18		
重 点	おうとう	新植	5	2	2	9	新植により、増加傾向
		廃園	0	0	0	0	
		差引	5	2	2	9	
く	り	新植	0	20	23	43	新植、廃園がともに多い 面積はやや減少傾向
		廃園	10	24	13	47	
		差引	△10	△4	10	△4	
そ の 他	りんご	新植	0	3	2	5	新植わずかであり、減少傾向
		廃園	1	3	5	9	
		差引	△1	0	△3	△4	
すもも	め	新植	3	4	6	13	新植により増加傾向
		廃園	1	0	3	4	
		差引	2	4	3	9	
キウイ フルーツ	その他	新植	1	0	0	1	新植、廃園の動きが少なく、 ほぼ横ばい
		廃園	0	0	0	0	
		差引	1	0	0	1	
合 計	計	新植	75	101	101	277	ぎんなんの新植により増加 傾向
		廃園	60	86	59	205	
		差引	15	15	42	72	
栽培面積 (ha)	成園	計	3,260	3,280	3,320	60	
		成園	2,880	2,860	2,830	△50	
		未成園	377	415	483	106	

（資料：農林水産省「作物統計」、園芸流通課「果樹栽培状況等表式調査」）

注）ラウンドのため合計値は一致しない場合がある。

が多くなっている。おうとうは近年新潟県に新植されたようである。くりは新植もある反面廃園もあり面積はやや減少にあるので将来的にはあまり明るさがみられない。うめ、キューイフルーツ、ぎんなん等は増加傾向にある、これらは副食物に必要なものと考えられるので今後減少傾向はあまりないものと考えられる。りんご、すももなどは、前者は大量生産地が他県にあること、すももなどは需要が減っていくものと考えられる。果樹の廃園は果実の需要の減少の面も考えられるが、果樹園の後継者のことも深刻な問題と考えられる。

(4) 果樹の主産地 (表3)

表3 果樹の主産地 (平成5年産果実生産量上位市町村)

(単位: t)

樹種	1 位		2 位		3 位		4 位		5 位	
	市町村名	生産量	市町村名	生産量	市町村名	生産量	市町村名	生産量	市町村名	生産量
日本なし	白根市	3,410	加茂市	2,330	新潟市	1,480	三条市	1,240	亀田町	1,090
ぶどう	白根市	1,610	聖籠町	830	中之口村	466	豊栄市	348	弥彦村	224
もも	白根市	1,190	加茂市	488	中之口村	388	三条市	348	田上町	261
かき	羽茂町	3,830	巻町	1,860	赤泊村	748	両津市	608	新穂村	396
くり	村松町	47	加茂市	23	朝日村	22	下田村	17	上越市	12
西洋なし	白根市	270	加茂市	53	月潟村	41	三条市	33	亀田町	29
おうとう	聖籠町	38	新発田市	4	白根市	1	豊浦町	1	-	-
うめ	亀田町	59	田上町	48	新潟市	36	豊浦町	29	出雲崎町	15
りんご	白根市	111	真野町	108	新発田市	89	鹿瀬町	57	月潟村	47
すもも	羽茂町	8	白根市	4	加茂市	4	月潟村	3	新発田市	3
キューイ フルーツ	五泉市	113	巻町	47	畑野町	34	荒川町	11	新潟市	4
(いちじく)	新発田市	22	巻町	17	柏崎市	11	大潟町	9	新潟市	6
(ぎんなん)	小国町	10	十日町市	10	柏崎市	6	高柳町	6	村松町	5
(くるみ)	牧村	16	中郷村	6	高柳町	1	-	-	-	-

(資料: 農林水産省「青果物生産出荷市町村別統計」)

いちじく、ぎんなん、くるみは、果樹栽培状況等表式調査)

県内の平成5年産果実生産量上位市町村を表3に示した³⁾。県内果実生産量の多い順に、1位、2位の市町村をあげると、日本なしが白根市・加茂市、かきが羽茂町・巻町、ぶどうは白根市・聖籠町、ももは白根市・加茂市の生産量が多いが、ついで西洋なしの白根市・加茂市、りんごの白根市、真野市、キューイフルーツの五泉市・巻町が本県の果樹栽培の中心といえる。

(5) 果樹用ハウス等の設置状況 (表4)

表4のアでは平成3年と平成5年の果樹用ハウスの設置面積と収穫量についてみると、加温ハウス、無加温ハウスがぶどう、おうとうなどの栽培でかなりの増加がみられる。

表4のイでは昭和58年から平成5年までのハウス設置面積の推移がみられるが、おうとうの設置面積が増加しているのが顕著である。

表4 果樹用ハウス等の設置状況

ア 果樹用ハウス等の設置面積、収穫量

(単位：千㎡、t)

種類	3年					5年				
	面積				収穫量	面積				収穫量
	加温ハウス	無加温ハウス	雨よけハウス	計		加温ハウス	無加温ハウス	雨よけハウス	計	
ぶどう	158	590	28	776	1,047	199	674	0	873	1,093
もも	-	4	-	4	6	-	4	-	4	6
なし	2	1	-	3	9	12	6	-	18	45
おうとう	-	-	114	114	19	1	128	70	199	29
いちじく	-	5	0	5	10	5	27	2	34	49
計	160	600	142	902	1,091	217	839	72	1,128	1,222

イ 果樹用ハウス等設置面積の推移

(単位：千㎡)

年 種類	58	60	62	元	3	5
ぶどう	987	889	841	867	776	873
もも	-	-	-	-	4	4
なし	-	1	2	2	3	18
おうとう	36	36	113	113	114	199
いちじく	-	-	1	3	5	34
計	1,023	926	957	985	902	1,128

(注)1 資料は園芸用ガラス室、ハウス等の設置状況調査で市町村から報告を受けとりまとめたものの抜粋である。

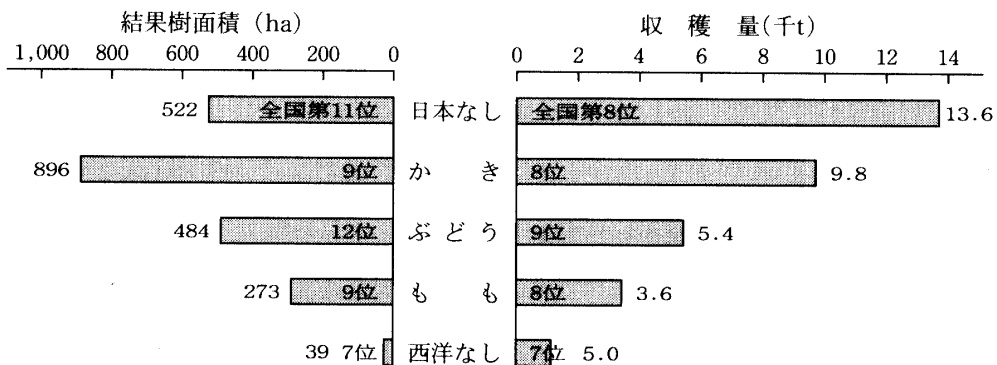
2 本調査は隔年で実施する。

(資料：新潟県農林水産部園芸・流通課「新潟県の園芸と養蚕」)

(6) 平成5年全国順位からみた主な果樹の生産状況

本県の主要果樹の生産状況が全国順位で、どの位に位置するかを示したのが図5である。収穫⁷⁾

図5 主な果樹の生産状況（全国順位・平成5年）



(資料：新潟県農林水産部園芸・流通課「新潟県の園芸と養蚕」)

量では西洋なし7位、日本なし・かき・ももは全国8位、ぶどうは9位を占めている。

図6はおもな果実の品種と収穫期と代表産地を示したものである。

図6 新潟の主な果物

(平成5年)

出荷時期	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	代表産地	全国順位	収 穫 量 (t)
な し		辛水・豊水	——					白根市	日本なし 8位	5,000 10,000 15,000
			二十世紀	——				加茂市		
				新さう	——			新潟市		13,600t
				西洋なし(ル	レクチェ)	——		三条市		全国の3.6%
ぶ ど う			——	巨ほう(ハウス)				白根市	9位	5,400t 全国の2.1%
				——	巨ほう(ろ地)			聖籠町		
				——	デラウェア			中之口村		
か き		刀根早生(とねわせ)	——					羽茂町・巻町	6位	9,760t 全国の4.0%
		平核無(ひらたねなし)	——					両津市		
も も			——	はくほう				白根市・加茂市		
				——	白桃(はくとう)	あかつき		三条市		
さくらんぼ	——							聖籠町・新発田市		

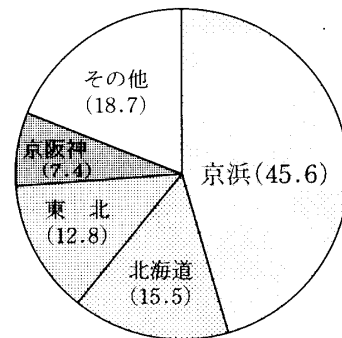
(資料：新潟県農林水産部・農地部「にいがたの農林水産業」)

(7) 平成5年県産果樹の県外出荷先別割合
 県産果樹の県外出荷先および割合は図7の通りである。出荷先は京浜に45.5%、北海道15.5%、東北12.8%、京阪神7.4%、その他が18.7%となっている。

約50%弱が京浜地方に出荷され、その内容は前述のブランド品目である日本なし、ぶどう、かき、もも、西洋なしが90%強をしめている。近年は高級果実とされる西洋なし(ルレクチェ)や巨峰、おけさ柿の他に果実を原料としたルレクチェワインやピーチワイン、フルーツようかんなども出荷されている。

図7 県産果樹の県外出荷先別割合

(平成5年)



(資料：新潟県農林水産部園芸・流通課「新潟県の園芸と養蚕」)

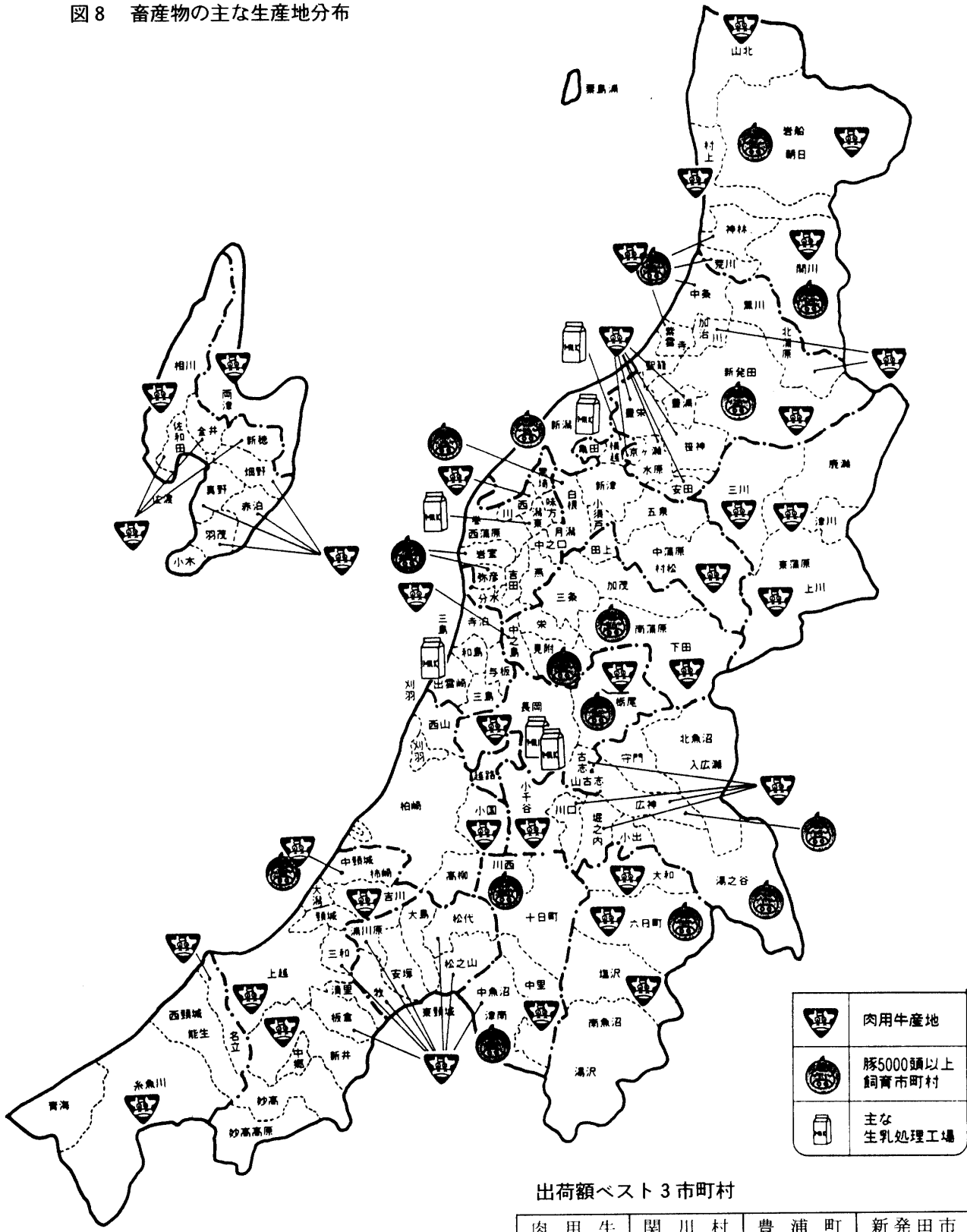
2. 畜 産 物

(1) 畜産物の生産と生産地 (図8) (図9)

畜産は、米、園芸に次いで農業粗生産額の約12%を占め、図8に示したように県内各地で生産されている。

その畜産粗生産額における畜種別割合と主要産地を平成5年の状況を図9で示した。牛、豚、鶏の割合は約3分割しているのが認められる。肉用牛は全体の粗生産額の10.4%で一番低く、生乳21.3%、鶏卵20.2%で約2割づつを占め、豚と鶏全体はそれぞれ31.6%、31.7%で3割強づつ

図8 畜産物の主な生産地分布



出荷額ベスト3市町村

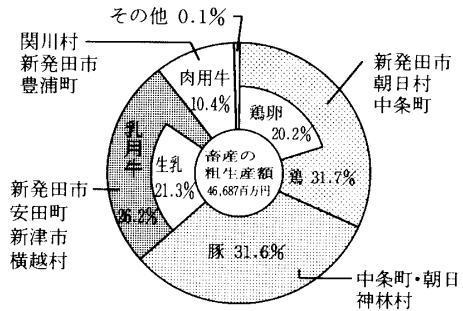
肉用牛	関川村	豊浦町	新発田市
乳用内	新発田市	安田町	横越村
豚	中条町	朝日村	神林村
鶏	中条町	朝日村	柿崎町

(資料：新潟県農林水産部・農地部「にいがたの農林水産業」)

を占めている。

肉用牛は主に関川村、新発田市、豊浦町で多く出荷され、乳用牛は新発田市、安田町、横越村、新津市が多く出荷している。「新潟牛」や「新潟県牛乳」としてブランド化が進められている。一方、豚と鶏は中条町、朝日村が多く出荷している。肉質のすぐれた系統豚ニホンカイが「ニホンカイポーク」として平成6年度にデビューした。これからは更に期待されるところである。

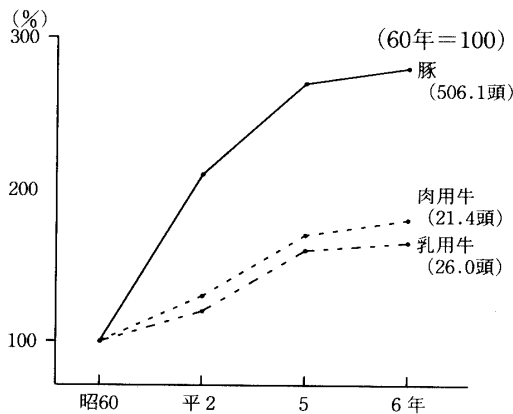
図9 畜産粗生産額の畜種別割合と主要産地（平成5年）



（資料：新潟県農林水産部・農地部「にいがたの農林水産業」）

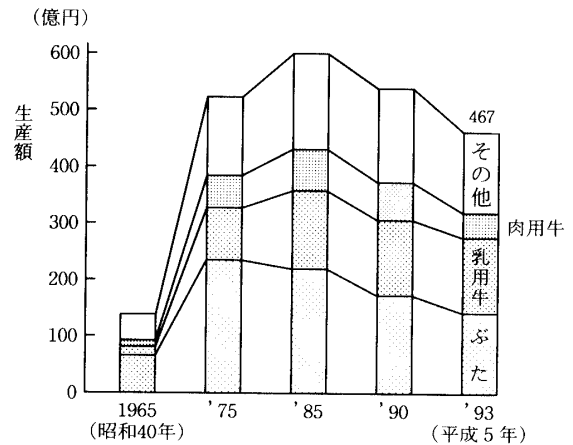
(2) 畜産物の生産額の動き（図10）（図11）（表5）

図10 1戸当たり飼養頭数の伸び



（資料：新潟県農林水産部・農地部「にいがたの農林水産業」）

図11 畜産生産額の移り変わり



（資料：新潟県農林水産部・農地部「にいがたの農林水産業」）

表5 家畜飼養戸数・頭羽数の動き

畜種		飼 養 戸 数		飼 養 頭 羽 数		一戸当たりの頭羽数	
		5 年	6 年	5 年	6 年	5 年	6 年
乳用牛	数	730 戸	680 戸	18,400 頭	17,700 頭	25.2 頭	26.0 頭
	前年比	92.4 %	93.2 %	100.0 %	96.2 %	108.2 %	103.2 %
肉用牛	数	1,250	1,110	24,700	23,700	19.8	21.4
	前年比	89.3	88.8	95.7	96.0	107.6	108.1
豚	数	570	510	276,500	258,100	485.1	506.1
	前年比	89.1	91.1	97.9	92.9	109.9	104.3
採卵鶏	数	140	140	4,871 千羽	4,926 千羽	34,793 羽	35,186 羽
	前年比	93.3	100.0	105.5	101.1	113.0	101.1

資料：農林水産統計

注：採卵鶏戸数は300羽以上。採卵鶏は種鶏を含まない。

平成6年2月1日現在の家畜飼養戸数及び頭羽数は表5²⁾に示すとおりで、前年度と比較すると飼養戸数はすべての畜種で減少し、飼養頭羽数は採卵鶏がやや増加を示した。これで1戸当たり飼養頭数で牛と豚別に年次変化の伸びを示したのが図10⁷⁾である。それぞれに伸びている。しかし生産額の伸びを図11⁸⁾に示したが、豚がかなり低くなってきている。

平成6年の飼養頭羽数を畜種別に全国に比べると乳用牛の17,700頭は全国24位を位置するし、肉用牛は23,700頭で全国34位である。やや下位の方であるが、豚は258,100頭で16位、採卵鶏の4,920千羽は19位に位置していて、年々減少しているものの中間層にある。

(3) 畜産物の需給状況（表6）

表6 畜産物の需給状況

区分	生産量 (A)	移出量	移入量	供給量 (B)	自給率 (A)/(B)	1人当たり 消費量	備 考
生乳	96,475 t	19,230 t	13,423 t	90,668 t	106.4 %	37.46 kg	飲用牛乳県内消費量 92,963 t
牛肉	7,173	3,468	258	3,963	181.0	1.12	(B)のうち正肉換算(70%) 2,774 t
豚肉	35,588	1,348	530	34,770	102.4	9.81	” 24,339
鶏肉	17,097	10,509	13,048	19,636	87.1	5.54	” 13,745
鶏卵	66,610	18,030	4,720	53,300	125.0	21.48	

資料：農林水産省「畜産物流通統計」、「牛乳、乳製品統計」

注：1 1人当たり消費量算出の人口は、5年10月1日2,481,446人を使用。

2 平成5年1月～12月

3 牛肉、豚肉は食肉センターの処理量に基づく数量

平成5年度の畜産物の生産は、表6²⁾に示すとおり、鶏肉を除く畜産物は県内需要を賅う他、一部京浜地方を主体に県外へ出荷されている。特に牛肉は県内需要量を約80%上回る生産が行なわれ県外へ出荷されている²⁾。

(4) 牛の生産と流通（表7）（表8）（表9）（表10）

乳用牛と肉用牛の飼養頭数は表5でみるように徐々に減っているが、1戸当たりの飼育頭数は逆に拡大してきたといえる。

牛乳の需給動向を表7²⁾で見ると、飲料牛乳等向け平成5年は97.2%に落ち込んだものの、乳製品向けが112.8%に増えた。

乳を沢山出すすぐれた乳牛のスーパーカウを飼育して、ミルクングパーラーという機械を導入することにより搾乳が効率よく行われている。搾乳牛1頭当たりの粗収益は、農林水産省「牛乳生産費調査」によると、生乳価額の増加により平成5年は838,426円で前年を104.9%上回っている。これは全国平均より155,059円多い額である。

肉用牛の出荷頭数はゆるやかな減少に向かっている²⁾（表8）。

肥育牛（和牛去勢若齢肥育）1頭当たりの粗収益は819,710円で前年（平成4年）に比べ71,615円（8.0%）減少した。これは全国平均859,735円より低い値である。

牛肉は輸入自由化4年目に入り、関税率の低下により輸入量がふえているため、和牛価格も低下している²⁾（表9）（表10）。

表7 牛乳の需給動向

区 分	年	生 産 費			仕 向 別 処 理 量								
		実 数	対前 年比	構成比	飲料牛乳等向け			乳 製 品 向 け			そ の 他		
					実 数	対前 年比	構成比	実 数	対前 年比	構成比	実 数	対前 年比	構成比
新 潟 県	60	t	t	%	t	%	%	t	%	%	t	%	%
	2	87,636	102.7	100	75,069	101.0	85.7	2,276	85.1	2.6	1,503	82.6	1.7
	4	94,882	101.6	100	86,265	102.1	90.9	2,386	102.8	2.5	818	110.0	0.9
	5	96,328	103.0	100	90,229	101.7	93.7	2,159	88.3	2.2	517	81.4	0.5
全国	5	8,625,699	100.6	100	5,032,403	98.1	58.3	3,470,589	104.3	40.2	122,707	105.6	1.4

区 分	年	備 考					
		牛乳・加工乳消費量		指定団体生乳受託販売量			飲 用 向 原料原価 (円/kg)
		実 数	対前 年比	実 数	対前 年比	占有率	
新 潟 県	60	t	%	t	%	%	118.22
	2	84,021	99.6	83,395	103.4	95.2	108.00
	4	93,028	102.8	91,737	101.6	96.7	111.00
	5	92,537	99.2	93,601	102.9	97.2	109.00
全国	5	90,080	97.8	-	-	-	-

資料：農林水産省「牛乳・乳製品に関する統計」

表8 肉用牛の出荷頭数の動向

(単位：頭、%)

区 分	年	肉 用 牛 計			肉 専 用 種			乳 用 肥 育 お す 牛			乳 用 め す 牛			肉 用 牛 計		
		実 数	対前 年比	構成比	実 数	対前 年比	構成比	実 数	対前 年比	構成比	実 数	対前 年比	構成比	実 数	対前 年比	構成比
新 潟 県	60	23,722	104.4	100	10,540	103.9	44.4	5,441	104.7	22.9	7,741	104.7	32.7	11,602	98.3	48.9
	2	18,891	98.6	100	6,794	98.2	36.0	5,047	87.7	26.7	7,050	108.3	37.3	9,361	92.4	50.0
	4	19,269	97.1	100	6,551	93.3	34.0	4,874	94.4	25.3	7,843	102.3	40.7	9,418	99.0	48.9
	5	18,149	94.2	100	6,313	96.4	34.8	4,303	88.3	23.7	7,516	95.8	41.4	8,906	94.6	49.1
全国	5	1,493,072	101.5	100	567,186	106.0	38.0	453,421	95.7	30.4	438,731	102.0	29.4	-	-	-

(資料：新潟県農林水産部農業総務課「新潟県農業の動き」)

表9 牛乳の輸入量と期末在庫量の推移

	輸 入 量		期 末 在 庫 量		備 考
		前年比		前年比	
2 年 度	384,199 t	105.6 %	116,869 t	105.5 %	
3 年 度	326,919	85.1	61,397	52.5	牛肉自由化初年度、関税率 70 %
4 年 度	423,429	129.5	51,515	83.9	関税率 60 %
5 年 度	566,911	133.9	86,663	168.2	関税率 50 %
6 年 4 月	51,129	81.7	84,839	135.2	関税率 50 %
5	56,654	123.3	97,843	129.7	
6	47,835	96.8	97,710	115.5	
7	46,593	90.0	94,002	102.6	
8	49,516	113.1	88,412	97.3	
9	45,381	96.9	84,604	90.5	
10	55,870	113.9	87,485	92.7	

資料：畜産振興事業団

表10 全国肉用子牛価格及び牛枝肉価格（東京市場）

	肉用子牛価格（千円／頭、%）		牛枝肉価格（円／kg、%）	
	黒毛和種平均	乳 用 種 雄	和牛去勢 A - 4	乳用去勢 B - 3
2 年 度	475	192	2,226 (102)	1,247 (97)
3 年 度	471 (99)	136 (71)	2,178 (98)	1,116 (90)
4 年 度	401 (85)	106 (78)	2,024 (93)	1,029 (92)
5 年 度	325 (81)	92 (87)	1,937 (96)	926 (90)
6 年 4 月	312 (94)	79 (84)	1,936 (99)	885 (93)
5	300 (91)	73 (76)	1,851 (103)	852 (93)
6	280 (91)	62 (67)	1,946 (103)	874 (105)
7	282 (90)	61 (64)	1,862 (95)	861 (94)
8	299 (91)	58 (63)	1,988 (104)	864 (95)
9	333 (103)	53 (59)	1,914 (98)	891 (97)
10	327 (102)	60 (61)	1,848 (100)	912 (98)

資料：肉用子牛は畜産振興事業団、牛枝肉価格は食肉流通統計

(5) 豚の生産と流通 (表11)

飼養戸数は、表5でみられるように510戸で前年に比べ60戸(8.9%)の減少である。

飼養頭数は、258,100頭で前年に比べ7.1%減少し、1戸当たりの飼養頭数は、飼養頭数の減少にもかかわらず戸数の減少率が大きかったため、前年の485.1頭から506.1頭へと拡大した。

表11 肉豚の移出入と価格の動向

(単位: 頭、%、円)

区 分	戸数	生産頭数			出荷頭数						県外移入頭数		豚枝肉価格(上)	
		実数	対前年比	構成比	県内出荷			県外出荷			実数	対前年比	実数	対前年比
					実数	対前年比	構成比	実数	対前年比	構成比				
新潟県	60	548,235	107.1	100	501,518	108.0	91.2	46,717	98.8	8.5	5,990	166.2	598	84.9
	2	542,292	96.3	100	502,396	96.1	92.6	39,896	99.9	7.4	2,338	30.0	489	104.7
	4	485,630	95.6	100	464,571	96.7	95.7	21,059	75.6	4.3	9,197	140.7	517	102.0
	5	476,414	98.1	100	458,366	98.7	96.2	18,046	85.7	3.8	7,079	77.0	447	86.5
全国	5	19,169,000	100.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	457	87.4

資料: 農林水産省「食肉流通統計」

豚の出荷頭数を表11よりみると、ほとんど県内出荷を占めている。生産頭数は前年に比べ98.1%で476,414頭と年々減少している。

粗収益は、農林水産省「肥育豚生産費調査」より、前年の平成4年に比べ93.8%で30,089円となり、全国平均31,243円より低くなった。

(6) 鶏の生産と流通 (表12)

鶏の飼養戸数と飼養頭数は、表5のとおりであり1戸当たりの頭羽数は拡大されている。

成鶏雌羽数の1戸当たりの飼養頭数は、前年の25,800羽から24,900羽へと縮小した。

ブロイラーの飼養羽数は115,000羽(11.3%)増加し、1,134,000羽となった。1戸当たりの飼養羽数は、前年に比べ5,500羽増え、54,000羽となり、全国平均の30,800羽を大きく上回っている。平成5年の生産量(表12)は前年に比べ98.7%とわずかに減少して12,992tで、県外移出量は12.4%であった。

表12 ブロイラーの県内需給の価格の動向

(単位: t、%、円)

区 分	戸数	生産量			県外移出量			県外移入量			県内処理量			卸売価格	
		実数	対前年比	構成比	実数	対前年比	構成比	実数	対前年比	構成比	実数	対前年比	構成比	実数	対前年比
新潟県	60	14,764	97.4	102.3	327	43.0	2.3				14,437	100.2	-	-	-
	2	17,258	100.7	86	385	726.4	0.2	3,169	96.6	15.8	20,042	98.4	100	-	-
	4	13,169	93.1	94.6	1,883	164.6	13.5	2,638	83.2	18.9	13,924	86.1	100	-	-
	5	12,992	98.7	92.4	1,745	92.7	12.4	2,817	106.8	20.0	14,064	101.0	100		
全国	5	1,738,942	97.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	231	90.6

資料: 農林水産省「鶏卵食鳥流通統計」

鶏卵の生産量は表13のとおり平成5年はやや増加し前年比104.0%になった。
卸売価格は平成4年に引き続き低迷した。

表13 鶏卵の県内需給と価格の動向

(単位：t、%、円/kg)

区分	生産量			県外移出量			県外移入量			県内供給量			卸売価格		
	実数	対前年比	構成比	実数	対前年比	構成比	実数	対前年比	構成比	実数	対前年比	構成比	実数	対前年比	
新潟県	60	52,883	102.3	120.7	9,634	90.0	22.0	573	71.4	8.5	33,822	104.9	100	270	103.4
	2	60,897	102.4	114.8	10,278	159.2	19.3	2,442	94.3	7.1	53,061	95.5	100	219	116.5
	4	64,068	103.7	118.9	14,660	121.5	27.2	4,457	120.8	8.3	53,865	100.9	100	167	67.3
	5	66,610	104.0	125.0	18,030	123.0	33.8	4,720	105.9	8.9	53,300	99.0	100	160	95.8
全国	5	2,597,684	101.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	162	95.9

資料：農林水産省「鶏卵食鳥流通統計」

(7) 飼料作物

飼料作物作付面積は、表14より、平成5年は前年より11.5%減の3,878haであり、そのうち青刈作物で4.3%、牧草類で13.6%づつ減少したのがわかる。

表15より、飼料作物作付面積の1/3以上を占める水田転作作付面積の減少に伴うもので、依然として転作水田の占める割合は高い。

表14 飼料作物の種類別作付面積の推移

(単位：ha、%)

区分 年次	青刈作物					計	牧草		その他	合計
	麦類	とうもろこし	ソルガム	その他青刈	うちイタリアン					
昭和60	43	341	158	617	1,159	3,310	1,241	61	4,530	
平成2	43	386	149	792	1,370	3,760	1,699	50	5,180	
4	272	343	120	264	999	3,370	1,336	12	4,381	
5	382	311	98	165	956	2,910	1,261	12	3,878	
対前年比	140.4	90.7	81.7	62.5	95.7	86.4	94.4	100.0	88.5	

資料：北陸農政局新潟統計情報事務所「耕地面積及び作付面積統計表」

表15 転作水田における飼料作物作付面積の推移

(単位：ha、%)

区分 年次	青刈作物					計	牧草		その他	合計
	とうもろこし	ソルガム	青刈いね	ホールクropp用いね	その他青刈		永年生	一年生		
昭和60	156	67	403	7	206	839	544	752	13	2,148
平成2	122	58	644	0	352	1,176	618	944	7	2,745
4	88	49	244	3	137	521	548	824	6	1,899
5	56	39	103	0	143	341	402	659	3	1,405
対前年比	63.6	79.6	42.2	-	104.4	65.5	73.4	80.0	50.0	74.0

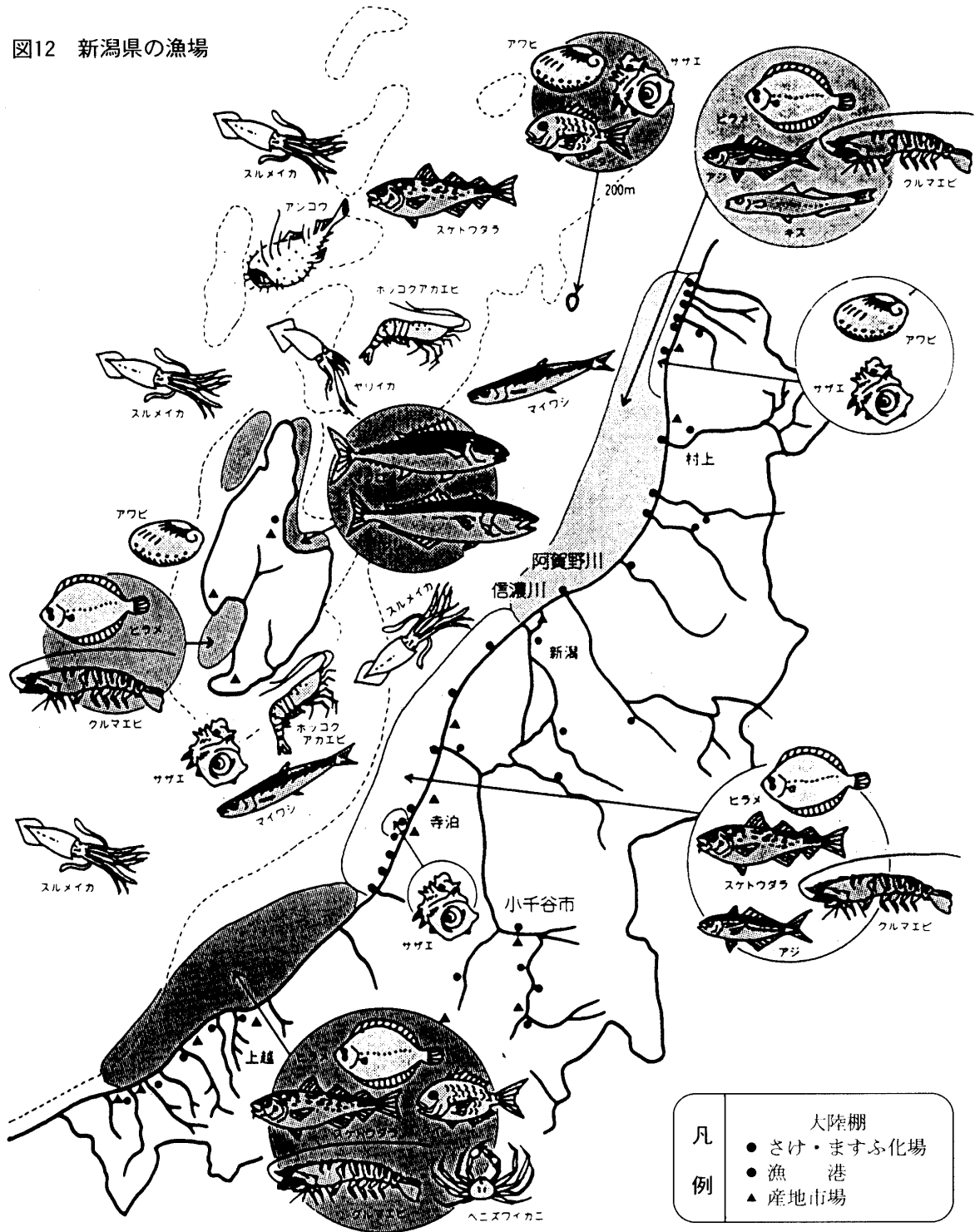
資料：県稲作振興課

注：ホールクropp用いねには飼料用米を含む。

3. 水産物

(1) 新潟県の漁場 (図12)

図12 新潟県の漁場



(資料：新潟県農林水産部・農地部「にいがたの農林水産業」)

新潟県は約600kmの長い海岸線と日本海の広い大陸棚や寒流と暖流が接する潮目が多く、海面漁業が行われるほか、信濃川や阿賀野川をはじめ大小河川や湖沼群なども多く内水面漁業も行われ、養殖業も盛んである。その主な漁場と産地市場を図12でみることができる。

(2) 地域別魚介類の種類と季節 (表16)

水揚げされる魚介類の種類は豊富で、表16のように地域別及び季節毎にまとめられる。年間を通じ多種類の水揚げがある。

表16 水揚げされる種類と季節

地域	季節	とれる魚介類の種類
下越	春	ヤリイカ・ワカメ・ハチメ・カレイ・ヒラメ・タイ
	夏	タイ・アワビ・サザエ・イガイ・スルメイカ・クルマエビ・ガザミ・キス
	秋	ブリ・アワビ・ナンバンエビ・イナダ・スケトウ・カマス・アユ
	冬	サケ・カワハギ・イワノリ・ハタハタ・マダラ・スケトウ
中越	春	カレイ・ヒラメ・ガザミ・イワシ・マス・タイ・クルマエビ
	夏	キス・クルマエビ・アサリ・ガザミ・サザエ・モズク・メバル・タイ
	秋	ヒラメ・イナダ・カレイ・カマス・サケ・メギス・アマダイ・スルメイカ・クルマエビ
	冬	マダラ・スケトウ・ナンバンエビ・アンコウ・タコ・ハタハタ・ヤリイカ・コダイ・イワノリ
上越	春	タイ・ベニズワイ・イワシ・カレイ・トビウオ
	夏	キス・タチウオ・スルメイカ・クルマエビ
	秋	スケトウ・イナダ・サバ・アジ・メギス
	冬	スケトウ・ズワイガニ・アンコウ・サケ
佐渡	春	タイ・カレイ・ヒラメ・マス・イワシ・ワカメ・ナンバンエビ・ヤリイカ・バイ貝
	夏	アワビ・イナダ・スルメイカ・マグロ・マダイ・クルマエビ・シイラ・モズク
	秋	カレイ・ヒラメ・アワビ・サバ・ハチメ・ナンバンエビ・イナダ・タイ・タコ
	冬	イワノリ・ナマコ・カキ・イナダ・ブリ・スケトウ・マダラ・カキ・ベニズワイ・スルメイカ・ズワイガニ

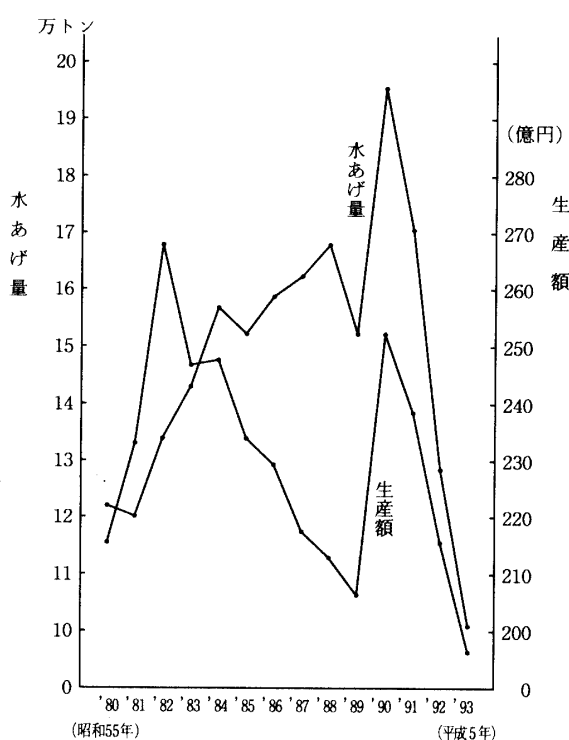
(資料：新潟県農林水産部・農地部「にいがたの農林水産業」)

(3) 水揚げ量と生産額の移り変わり (図13)

海面漁業と養殖業における水揚げ量と生産額の10年間の移り変わりを図13でみた。

平成2年の水揚げ量をピークに、年々急激な落ち込みが続き、平成5年の生産額は過去最低額となっている。

図13 水揚げ量と生産額の移り変わり (海面漁業と養しよく業)



(資料：新潟県農林水産部・農地部「にいがたの農林水産業」)

(4) 水揚げ量と生産額 (図14)

平成5年の海面漁業の水揚げ量は100,767t、生産額は1,873,300万円であり、県では過去最低額となった。

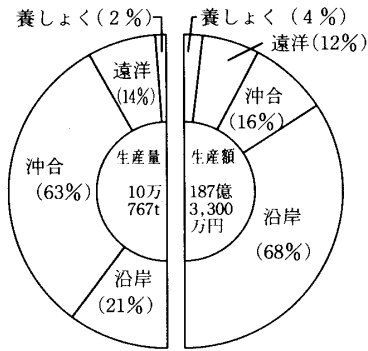
そのうちの養殖業の占める割合は生産量で2%、生産額では4%であり、種類はかき・わかめ・ぎんざけが多く養殖されている。特にぎんざけは全国第3位の水揚げ量をあげた。

沖合漁業の水揚げ量は63%を占めているが、いわし・さば・するめいかなど価格が安い種類のため生産額は16%にとどまる。

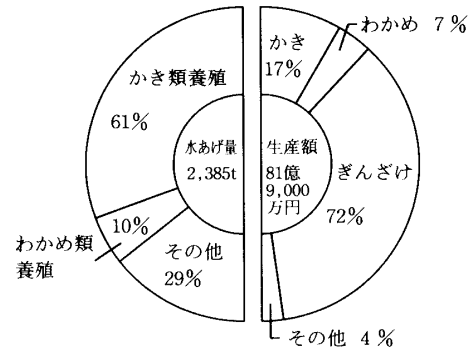
沿岸漁業は水揚げ量が21%であるが、鮮度が良いものや、かになど高価な種類のため生産額が

図14 水揚げ量と生産額（平成5年）

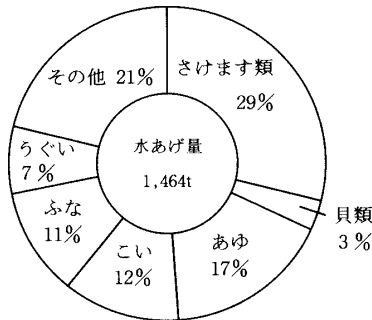
◆海面漁業の水あげ量・生産額（平成5年）



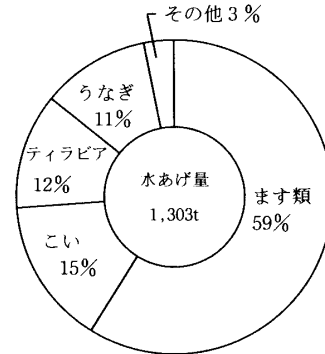
◆海面養殖の水あげ量・生産額比較（平成5年）



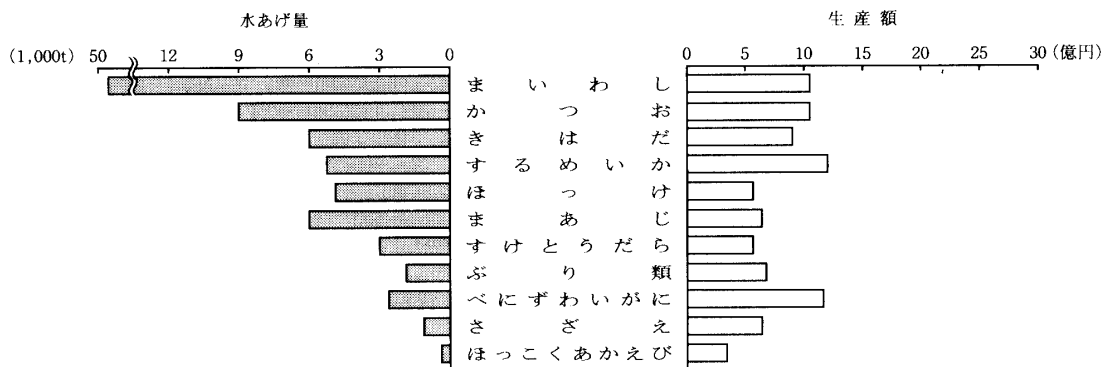
◆内水面漁業の魚種別水あげ量（平成5年）



◆内水面養殖の水あげ量（平成5年）



◆魚の種類別水あげ量と生産額（1993年、平成5年）



（資料：新潟県農林水産部・農地部「にいがたの農林水産業」）

68%を占めた。

平成5年の内水面漁業では、さけ・さくらます・あゆなどを中心に1,464tの水揚げ量であった。中越地域ではにしきごい・ます類・ティラピアなど養殖されている。

昭和41年に50万尾のくるまえびの稚魚の放流に始まった海面栽培漁業は、昭和51年に佐渡郡真野町に県栽培漁業センターが建設され、「ヒラメ海底牧場」としてひらめ・さざらなどの稚魚が人工ふ加され育成されている。

また、年々漁業に携わる人の年齢が高くなり、平成5年では男性60歳以上が47%、男性40～59歳が40%、男性その他8%、女性5%の割合で占めている⁸⁾。

新潟県の水産業は、規模の小さな沿岸漁業が中心で、鮮度を保つ努力と加工の技術や近代化にも工夫されている。

栄養的には新鮮な魚油が見直されているので、鮮度の良い魚介類のまま市場へ出ることを期待している。

Ⅳ お わ り に

新潟県では古くから伝統技術にも支えられ、かき、日本なし、ぶどうなど高品質なくだものが生産されてきた。特に佐渡を中心に県内で生産される“おけさ柿”は全国的に有名である。新潟県では300年前頃から、日本なしやももが栽培されていたが、かきの栽培は江戸時代に佐渡ではじまり、昭和のはじめに「平核無^{ひらたねなし}」という品種をとりいれてから生産がふえた。これが“おけさ柿”である。最近では西洋なしルレクチェの生産が増し人気をよんでいる。

くだものは永年性作物であり、その生産量を短期間で調整することは困難であること、収穫作業に沢山の人手がかかることなどから栽培面積が少しずつ減っているが、品種改良やハウス栽培などで品質のよいものを長期間生産するようにくふうし生産額は少しずつふえている。

果実生産については、消費者の嗜好の変化に即しつつ、品質の向上とコストの低下を図るとともに県外出荷や輸出の振興、高品質果実の開発などによる需要の拡大を図ることが今後の課題と考えられる。

畜産物については、米や園芸に次いで農業粗生産額の約12%を占め、その畜種別割合では、牛・豚・鶏が各々30%余りの同率を占めている。

「新潟牛」「新潟県産牛乳」「ニホンカイポーク」などブランド化が行われ、品質が優れ、価格も低下して、これから大いに期待されている。

現在、豚の飼養頭数は全国16位である。

水産物については、平成2年をピークに水揚げ量が減少し、10万tを下まわった。

魚介類の種類は季節、地域毎に豊富である。

沿岸漁業は生産規模が小さく水揚げ量が少ないにもかかわらず生産額をあげているのは、新鮮で品質が良く高値な種類によるものである。

養殖業はあまえびで始められたが、さけます・あゆ・ひらめ・さざえなどが盛んであり、佐渡地方の海底牧場などにこれからも期待される。

資料蒐集に際しまして、県農林水産部農業総務課農業農村政策室主任小幡浩之様にいろいろとご協力を頂き、ご指導を賜りましたことを感謝し、厚く御礼申し上げます。

尚、Ⅰ、ⅡとⅢの1. 果樹については歌城、Ⅲの2. 畜産物、3. 水産物については玉木、Ⅳについては歌城、玉木が執筆担当した。

参考文献

- 1) 新潟青陵女子短期大学研究報告 第26号 1996. 3
- 2) 平成6年度新潟県農業の動き 新潟県農林水産部農業総務課 平成7年3月
- 3) 新潟県の園芸と養蚕 新潟県農林水産部園芸・流通課 平成7年3月
- 4) 新潟県園芸指定産地の概要 新潟県農林水産部 平成元年3月
- 5) 食料需給表 農林水産大臣官房調査課 平成5年3月
- 6) 新潟県農業の現状 新潟県農林水産部 平成7年3月
- 7) 明日へ伸びるにいがたの農林水産業 新潟県農林水産部 平成7年3月
- 8) にいがたの農林水産業 新潟県農林水産部・農地部 平成7年3月
- 9) 食品学 光永俊郎著 培風館 1996. 2
- 10) 食品活論 福場博保他共著 光生館 1995. 3